

郷土の慕はしきは、山河の美しい爲でもなければ、其の風土の住み好き爲でもありません。其處には父母あり、兄弟あり、親族あり、故舊あり。思ひ出深き山あり。河あり。寺あり。社あり。祖先幾代こゝに生活し、永く此の地に眠る。山河情あり木石又知友、郷土の戀しきはそれが爲なのであります。

文は先づ郷土の風光を讚美し、

『或は坦々たる田園遠く連なり、或は山谷に掌大の田園を點綴し、彼處に二軒此處に五軒、川に臨んでは自ら清流の調を聞き、山間に位しては清風時に薫じ來る。都塵を去る百里、空氣自らさわやかに、碧空の深きを仰ぎ、又は大海の洋々たるを望む。』

と其の愛すべく親しむべき所以を物語り、次いで其の傳説美に入り、

『山あり、形頂上に於て缺くるが如きを名づけて九合山といふ。傳へいふ、昔天狗此の山を一夜にして造らんとす、成る所九分にして既に夜明けたりと。沼あり、故老いふ、昔長者一日にして其の田を植ゑしめんと欲す、半ばにして日暮れんとしければ、彼の長者扇を以て落日をかへせり、夜明けて見れば、廣大なる田地化して此の沼となると。』

と郷土が持つ幾多の傳説を巻き込み、更に歴史美に移り、

『老樹鬱蒼たる境内に神さびて立てる宮居は、たま〜延喜式に其の神名ありて、由緒の古きを知るものあり。郷人氏神と仰ぎ、ひとしく氏子と稱するものは、祖先以來崇敬の厚かりしところ。』

『地名必ずしも歴史を語るにはあらねど、時に本莊・新莊・今莊等の名に莊園の歴史をうかゞふべく、本郷・横田・新田等の名に郷土發達の跡を尋ねべく、三日市、五日市、二十日市等の名に昔日の商業を思ふべし。平和なる山川田野も、時に兵馬のちまたと化しけん、要害山と呼び、勢引山と呼び、城山と呼び、陣場野と呼ぶ。』

と其の由來するところの遠く且つ尊きことを叙し、尙ほ進んで祖先の功績に及ぼし、

『道の邊に咲く野菊の花はさゝやかなれども、思へばそもそも何時の世に芽生えそめ、咲きそめにけん。觀すれば一輪の野花にも殆ど限知らぬ傳説の存在するを認むべし。我等の據つて立つ郷土は、そも何時の世に開かれ、幾百千年を経て今日に到りしものぞ、穰々たる美田も、もとこれ祖先の手によりて開墾せられ、鬱蒼たる山林、亦其の苦心によりて今日の美を致ししなるべし。我等の父母はもとより、祖父母も曾祖父母もかつて此の郷土に嬉戯し、此の郷土に人となり、彼の田園を耕し、彼の森林を養ひつらん。』

と其の一塊の土、一木一草の末に至るまで、傳統の存在を物語らないものは無いことを説き、最後に

『郷土の由來を知り、其の今日に至れる跡を尋ぬる時、始めて之に對する眞の理解を生じ、隨つて之を愛する情の油然たるものあるを見るべし。祖先の苦心經營を知らば、其の偉業も益々意義を加へ、郷土の産業も其の由來する所を察せば、或は更に之を發達せしむる途あるを發見せん。故老に問ひ、口碑に尋ね、傳説に察して郷土變遷の大略を知らば、故人も舊知の感あり、悠久たる往時も之を目前に見るが如き心地すべし。』

と以上を總括して一篇の結論としてゐます。

此の文の特色は各段の結語で、

第一段では『郷土の景色よし奇勝にあらずといふも、しかも甚だ愛すべきものあるに非ずや。』第二段では『かゝる種の傳説多く荒唐に似たりといへども、古人木訥の心さながら通ふが如く、しかも冥々の中に郷人を教誨せしもの少からず。』

第三段は『詣づる毎に郷土の古を思ひ、心自ら純に、氣自らさわやぐをおぼえん。』

第四段では『是等は口碑と結びて戰國の美談を傳へ、又は文書に參酌して歴史の跡を知るべき

もの少からず。』

第五段では『一片の月山上にかゝる時、自ら故人をしのびてうたゝ感慨の深きをおぼゆ。』

第六段では『山川すべて情あり、愛郷の心切ならざらんとするも得べけんや。』

と各段共に段末に含蓄に富んだ結語を配し、前段は後段を呼び、後段は前段を受け、宛然長蛇の陣を敷けるが如く、筆路整然、何人をも説得しなければ止まない意氣の旺盛さは、眞に卷末の雄篇として、一讀讀者に迫るの慨があります。

『風光』蘇軾詩の『秋後風光雨後山』に出で、けしき又はながめの意、風景に同じ。

『珍奇』書經の『珍禽奇獸、不_レ育_二於國_一。』に出で、めづらしく奇妙なること、

『坦々』易經の『履道坦々、幽人貞吉。』に出で、平坦なるさま、坦然に同じ。

『點綴』蘇軾詩の『雲散月明誰點綴』に出で、程よくあしらふの意、ちらほらと取りあはすること、

『碧空』李白詩の『孤帆遠影碧空盡』に出で、すつきりとはれた青空の意、

『洋々』詩經の『河水洋洋』に出で、水の盛んに充ち満ちたさま、

『奇勝』めづらしい景色のよいところ、

「長者」禮記の「謀於長者、必操几杖以從之。」に出で、年長者又は徳の衆人にすぐれた人をいふ。

「傳説」は口碑に同じく、かたりつたへの意、

「荒唐」莊子の「以繆悠之説、荒唐之言、無端崖之辭、時恣縱而不儻、」に出で、言説のとりとめなきこと、

「木訥」論語の「剛毅木訥、近仁」に出で、「木」は質樸、「訥」は訥辯の義、無骨にて飾なきこと、

「冥々」莊子の「昭昭生於冥冥、有倫生於無形。」に出で、知らずくの意で、事のあらはならざるさまをいふ。

「教誨」書經の「古之人、胥訓告、胥保惠、胥教誨」に出で、をしへたとすの意、教訓に同じ。

「鬱蒼」は鬱々蒼々の意で、樹木のこんもりと茂るさま、鬱葱に同じ。

「神さびて」は古びて奇しく尊いの意で、森嚴で神々しいこと。

「延喜式」書名、五十卷。本朝法家四部書の一で、延長五年藤原忠平等の選進するところ、

朝廷年中の儀式、用途、百官の臨時の作法、其他諸國の恒例などを記録したものである。

これと延喜格とを合せ稱して延喜格式ともいふ。

「由緒」は物事の由來せし端緒の意で、ゆゑよし又はすぢみちの意。

「氏神」は氏の祖神、又は其の氏に由緒ありて尊崇する神、こゝでは産土神即ちうぶすながみを意味してゐる。

「氏子」は氏の子孫、又は氏神の苗裔、こゝでは産土神の擁護を受くる地に生まれた民の意、

「莊園」平安朝代以後、權勢ある人々並に社寺の私有地にして、莊の號ある土地の稱、

「兵馬のちまた」兵馬は兵器軍馬の意で、こゝでは戦争のこと、「ちまた」は巷で、道の分かれるところ、こゝでは「ところ」「場所」の意、

「口碑」は五燈會元の「路上行人口是碑」に出で、いひつたへの意、傳説に同じ。

「参酌」後漢書の「叔孫通頗採禮經、参酌秦法。」に出で、事情をまじへ察して酌量すること。

「傳統」は系統をうけ傳へるの意で、しきたり又はならはしの意、

「穰々」十八史略の「五穀蕃熟、穰々滿家、」の意で、穀物が美しくみのつてゐるありさま、

「美田」周禮の「家所養者多、與之美田。」に出で、肥饒なる田地即ちこえたるよき田の意、

「嬉戲」嬉々として遊戯するの意で、あそびたはむること、史記の「孔子爲兒嬉戲、常陳俎豆。」に出づ。

「感慨」かんじなげくの意で、李白詩の「知音不_レ易得、撫劍增_二感慨。」に出づ。

「由來」易經の「非一朝一夕之故、其所由來者漸矣。」に出で、由つて來たれる所、又は事の起りの意、由緒、來歴に同じ。

「油然」孟子の「天油然作_レ雲、沛然下_レ雨。」に出で、物の盛んに起るさま、

「經營」詩經の「旅方剛、經營四方。」に出で、工夫をこらして物事をいとなむこと、

「遺業」晉書の「受_二父遺業。」に出で前人の遺しおきたる事業、遺緒に同じ。

「故老」詩經の「召_二彼故老、訊_二之占夢。」に出で、年老いたる人、又は老成の人の意、古老に同じ。

「變遷」推移に同じく、うつりはかるの意、

「舊知」舊識に同じく、ふるき知りびと、又はむかしのなじみの意、

「悠久」中庸の「悠久所以載_レ物也」に出で、遙かに久しいこと、長久に同じ。

「往時」いにし時の意で、以前又はむかしの意、

補充文には北原白秋氏の「我が故郷」をあげておきませう。

我が故郷

その一

私の郷里柳河は水郷である、さうして静かな廢市の一つである。自然の風景はいかにも南國的であるが、柳河の街を貫通する數知れぬ溝渠の匂には、既に日にく廢れて行く舊い封建時代の白壁が今なほ懐かしい影を映す。肥後路から、或は久留米路から、或は佐賀から、筑後川の流を超えて、我が街に入る來る旅人は、その周囲の大平野に分岐して、遠く近く瓏銀の光を放つてゐる幾多の人工的河水を眼にするであらう。さうして、歩むにつれて、その水面の隨所に、菱の葉、蓮・眞菰・河骨、または赤・褐・黄・緑その他様々の浮藻の強烈な更紗模様の中に、微かに淡紫のウォーターヒヤシンスの花を見出すであらう。水は清らかに流れて

廢市に入り、人もない厨の下を流れ、水門に堰かれては、三味線の音の緩む午下りを、小料理屋の黒いダリヤの花に歎き、酒造る水となり、汲水場に立つ湯上りの娘の唇を啾ぎ、氣の弱い驚の毛に擾され、さうして、夜は観音講の懐かしい提燈の灯をちらつかせながら、樋を隔てて海近い沖の端の鹼川しほがわに落ちて行く。静かな幾多の溝渠は、かうして昔のまゝの白壁に寂しく光り、たま／＼芝居見の水路となり、蛇を奔らせ、變化の多い少年の祕密を育む。水郷柳河はさながら水に浮いた灰色の柩である。

折々季節につれて四邊の風物も改まる。短い冬の間に見る影もなくよれ果てた田や畑に、刈株だけが鋤き返されたまゝ色もなく乾き盡し、羽に白い斑紋を持つた怪しげな高麗鳥こうらいどり——この地方特殊の鳥——だけが、廢れた寺院の屋根に鳴き叫ぶ。さうして、青い股引を着けた杵の實採りの男が、静かに暮れて行く卵色の梢を眺めて、無言に手を動かしてゐる外には、展望の廣い平野だけに、何等の見るべき變化もなく、凡べてが陰鬱な光に被はれる。柳河の街の子供は、かういふ時、幽かなシュブター——方言、鮫の一種——の腹の閃きにも、話に聞く生贍取の青い眼付を思ひ出し、海邊の黒猫はほゞけ果てた白い穂の限りもなく戦いでゐる枯葦原の中にちつと蹲つたまゝ、過ぎ行く冬の囁に晝もなほ耳傾けて死ぬであらう。

いづれにも増して春の季節の長いといふことは、またこの地方を限りなく悲しいものに思はせる。麥が伸び、見渡す限りの平野に黄色い菜の花の毛氈が柔かな軟風に薫り初める頃、まだ見ぬ幸福を求めるために、うら若い町の娘の一群は、笈に身を褰し、哀れな巡禮の姿となつて、始めて西國三十三番の札所を旅して歩く。——巡禮に出る習慣は、別に宗教上の深い信仰からでもなく、單にお嫁入の資格として、どんな良家の娘にも必要であつた。——その留守の間にも、水車は長閑かに廻り、町外れの飾屋の爺は、大きな鼈甲縁の眼鏡を掛け、怪しい金象嵌の仕事にちんかちと錘を鳴し、ブリキ職人はちり／＼と赤い封蠟を溶かし、黄色い支那服の商人は、生温かい挨拶の言葉を掛けて戸毎を覗き初める。春も半ばとなつて、菜の花も散りかゝる頃には、街道の處々に木蠟を均して干す畑が蒼白く光り、さうして狐憑の女が他愛もなく狂ひ出し、野の隅には、粗末な蓆張の圓天井が作られる。その芝居小屋の蔭を行く馬車の喇叭の懐かしさよ。さはいへ、大麥の花が咲き、芥子の花も實となる晩春の名残惜しさは青くさい芥子の蔓や新しい蚕豆の香に、いつしかとまた紛れていく。

まだ夏には早い五月の水路に、杉の葉の飾を取付け初めた大きな三神丸の一部を、ふと學校歸りに發見した沖の端の子供の喜は何に譬へよう。爐の方の化粧部屋は蓆で張られ、昔なが

らの廢れかけた舟舞臺には、櫻の造花を隅なく翳し、欄干の三方に垂した御簾は彩色も褪せ果ててはゐるが、水天宮の祭日となれば、紺の半被の町内の若い衆に棹されて、幕合には笛や太鼓や三味線の囃子面白く、町を替へる度に幕を替へ、日を替へる度に歌舞伎の藝題も取替へて、同じ水路を上下すること三日三夜、見物人は皆あちこちの溝渠から小舟に棹して集り、華やかに水郷の歡を盡して別れるものの、何處かに頽廢の趣が見えて、祭の濟んだ後から、夏の哀れは日に／＼に深くなる。

其の二

この騒が静まれば、柳河にはまたゆかしい螢の時季が来る。

あの眼の光るは

星か螢か鶉の鳥か

螢ならお手に取る

お星様なら拜みませう……………

稗い時に、私はよくかういふ子守唄を聞かされた。さうして、恐ろしい夜の闇におびえなが

ら、乳母の背中から手を出して、例の首の赤い螢を握り締めた時、私はどんなにか好奇の心に顫へたであらう。實際螢はこの地方の名物である。馬鈴薯の花咲く頃、街の小舟はまた幾つとなく矢部川の流を溯り初める。さうして、甘酸い燐光の息する度に、青々と眼に沁みる螢籠に、美しい假寢の夢を時たまに閃かしながら、水のまに／＼夜を籠めて流れ下るのを習慣とするのである。長い霖雨の間に、果實の樹は重くしなだれ、ものの卵はねば／＼と瀦水のむじな藻に絡みつき、蛇は木に登り、眞菰は繁りに繁る。柳河の夏はかうして凡べての心を重く暗く腐らしたあと、池の畔に鬼百合の赤い閃きを先立てて、焼くやうな暑熱を注ぎかける。

日光の直射を恐れて羽蟻は飛び巡り、溝渠には水が潤れて悪臭を放ち、病犬は朝鮮薊の紫の刺に後退りながら咆え廻り、蛙は蒼白い腹を仰向けて死に、泥臭い鮎の頭は苦しさうに泡を立て初める。七八月の炎熱はかうして平原の到る處の街々に激しい流行病を仲介し、日毎に夕焼の赤い反射を浴びせかけるのである。

この時、海に最も近い沖の端の漁師連中は、男も女も半裸體のまま、紅い西瓜を食り、石炭酸の強い異臭の中に晝は寝ね、夜は病魔退散の呪として、廢れた街の中、または堀の柳の蔭

に縁臺を持ち出しては、盛に花火を揚げる。さうして、朽ちかゝつた家々のランプの蔭から、死に瀕したコレラ患者は恐ろしさうに蒲團を匍ひ出し、たゞちつと薄明りの中に色變へて行く五色花火のしたゝりに疲れた瞳を集める。

犬殺しが歩き、巫女が酒倉に見えるのもこの時である。さうして、雨乞の思ひ／＼に白粉をつけ紅い隅取を凝した假裝行列の、日に／＼に幾隊となく續いて行くのもこの時である。さはいへ、また久留米緋を着け、新しい手籠を抱へた菱の實賣の娘の懐かしい『菱シャンノウ。』の呼聲を聞くのもこの時である。

九月に入つて、登記所の庭に黄色い雞頭の花が咲くやうになつても、まだコレラは止む氣色もない。若い町の辯護士が忙しさうに粗末な硝子戸を出入りする頃には、秋はもう、青い澁柿を搗く酒屋の杵の音にも、新しい匂の爽かさを忍ばせる。

祇園會が了り、秋も更けて、線香を乾かす家、芥子油を搾る店、パラフィン蠟燭を造る娘、提燈の繪を描く義太夫の師匠、凡べてがしんみりとした氣分に物の哀れを思ひ知る十月の末には、まづ秋祭の準備として、柳河のあらゆる溝渠は、あらゆる市民の手によつて、一旦水門の扉を閉され、水は干され、魚は掬はれ、腥い水草は取除かれ、溝泥は綺麗に浚ひ盡され

る。この『水落ち』の楽しさば、町の子供の何にも代へがたい季節の華である。さうして、この一騒のあとから、また久しぶりに清らかな水は廢市に注ぎ入り、楽しい祭の前觸が、異様な道化の服裝をして、喇叭を鳴し拍子木を打ちながら、明日の芝居の藝題を面白可笑しく披露しながら、町から町へと巡り歩く。

祭は町から町へ日を異にして準備される。さうして、彼我の家庭を擧げて往來しては、一夕の愉快な團樂に美しい懇親の情を交すのである。祭の後の寂しさは、それはまた格別である。野は火のやうな杓紅葉に百舌がたゞ啼きしきるばかり、何處からともなく漂浪うて來た傀儡師の肩の上に、生白い人形の首がかつく／＼と眉を振る物凄さも、いつの間にか人々の記憶から搔消されるやうに消え失せて、寂しい寂しい冬が来る。

要するに柳河は廢市である。とある街の辻に古くから立つてゐる圓筒上の黒い廣告塔に、折々西洋奇術の貼札が張りつけられて聊か景氣を添へる外には、よし今のやうにアセチリンガスを點け、新に電氣燈をつけて見たところで、格別これはいふ變化もなく、一切の沈滞から、美しい手品を見せるやうに、容易く甦らせることは不可能であらう。ただ偶々東京歸りの若い齒科醫が、その障子に氣紛れな赤い硝子を入れただけのこと、屋根にはいつしか薊

の咲いた古い旅籠屋には、ほんの商用向の旅人が、殆ど泊つた氣配も見せないで出立して去ふ。たゞいつ通つても、白痴の久さんは青い手拭を被つたまゝ、同じ風に同じ電信柱を搔抱き、ボンボン時計を修繕する禿頭は、硝子戸の中に俯向いたぎり、チクタクと音をつまみ、本屋の主人は蒼白い顔をして、空をたゞ視つめてゐる。かういふ何の物音もなく眠つた街に住む人は因循で、たゞ柔順しく、僅に良家の娘のあの情の深さうな、そして流暢な軟かみのある語韻の、九州には珍しいほど京都風なのに、オランダ訛の溶け込んだ懐かしさがあるだけである。

農村用 **高等小學讀本の眞使命** 卷一終

昭和三年三月五日初版印刷
昭和三年三月十日初版發行

農村用高等小學讀本眞使命(奥附)
定價 金參圓五拾錢



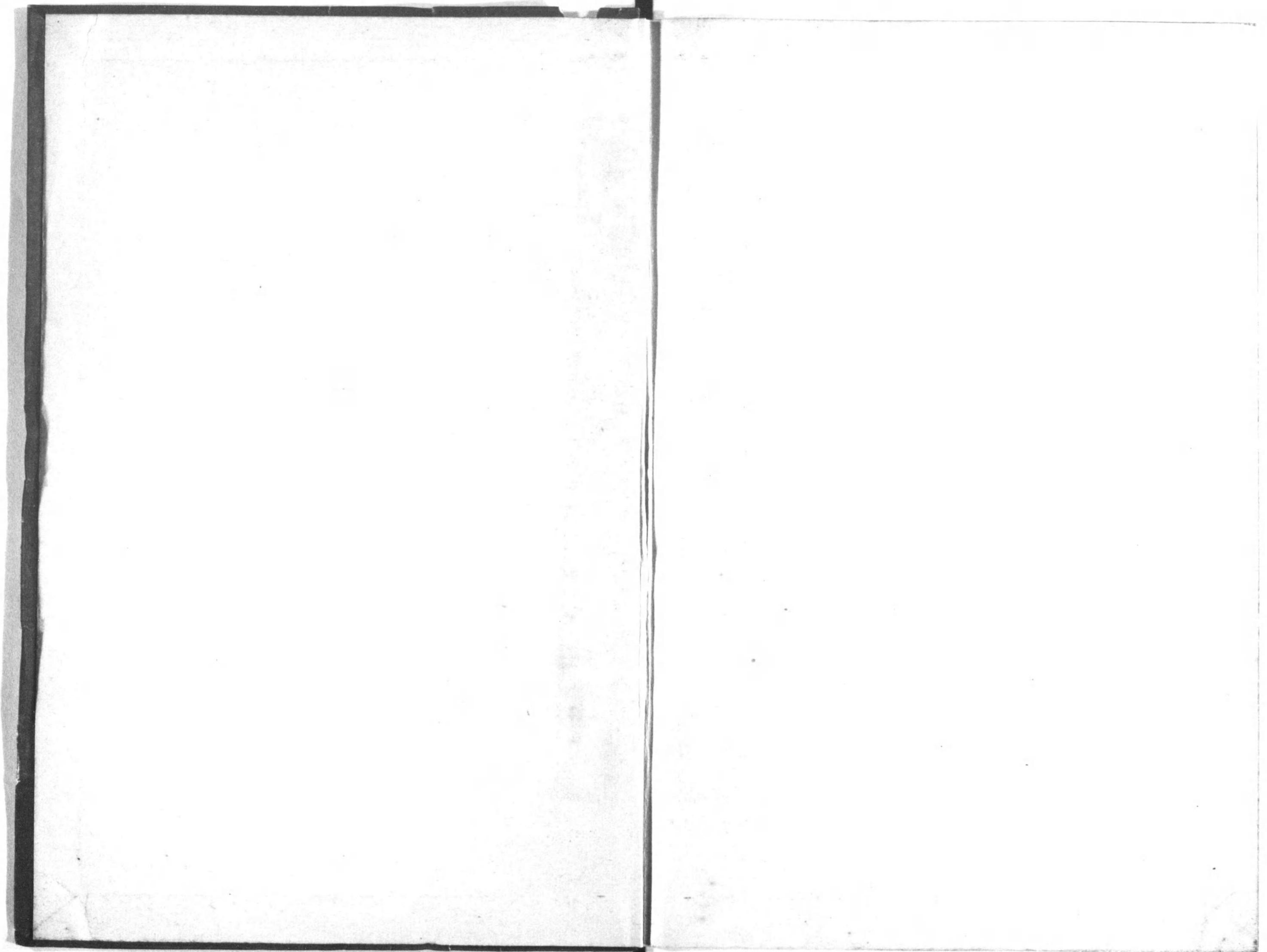
著者 友納友次郎
東京市京橋區入舟町五丁目一番地
發行者 藤原惣太郎
東京市京橋區南八丁堀三丁目十番地
印刷者 山崎治兵衛

發行所 東京市京橋區入舟町五番 明治圖書株式會社

賣捌所 東京 林六合館 大阪 柳原書店
名古屋 川瀬書店 久留米 菊竹金文堂 佐賀 大坪惇信堂

(製本部……關根・中條・製本)

【所刷印社星七 部刷印社會書圖治明】



終

